

大江健三郎

新しい人よ眼ざめよ



新しい人よ眼ざめよ

大江健三郎

新しい人よ眼ざめよ

一九八三年六月十三日 第一刷発行
一九八四年三月十二日 第十刷発行

著者——大江健三郎

© Kenzaburō Ōe 1983, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九〇一—二三(大代表) 振替東京—三〇〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200530-1(0) (文1)

新しい人よ眼ざめよ
目次

無垢の歌、経験の歌

5

怒りの大気に冷たい嬰兒が立ちあがって

35

落ちる、落ちる、叫びながら……

75

蚤の幽霊

97

魂が星のように降って、跼骨^{むし}のところへ

147

鎖につながれたる魂をして

189

新しい人よ眼ざめよ

239

新しい人よ眼ざめよ

装 幀 司 修

* 装幀見返しは武満徹作曲「雨の樹」の楽譜原稿。© 1981 Schott Japan
カバー装画はブレイク装画「ジェルサレム」七六による。

無垢の歌、
経験の歌

外国へ向けて、職を得た滞在をふくむ、ある長さの旅に出るたび、見知らぬ風土で根なし草となる自分が、ありうべき危機に何とか対処しようとする——すくなくとも心の平衡をたもちうるようにと、ひとつの準備をすることになっている。それはただ、出発までの時期読みつづけた一連の書物を、旅に携行することにすぎぬが。事実僕は、いま異邦の土地に孤りているのはそのとおりだが、しかしこの間まで東京で読んでいた本のつづきを読んでいると、ビクついたり苛だったり沈みこんだりする自分を励ましえたのである。

この春は、ヨーロッパを旅行した——といってもテレヴィ・チームとともに駆け廻るようであったウィーンからベルリンへの旅程の、どこでも樹木は新芽を吹いていず、花といえは葉よりさきに開いて無闇に黄色い連翹と、やはり葉の青みなしに地面から蕾をもたげるクロッカスのみだったが。この出発の際には、二、三年読みつづけてきたマルカム・ラウリーの「ペンギン・モダーン・クラシックス」版を四冊持つて行った。二、三年ラウリーを読みつづけたといったが、それにあわせて僕はラウリーに触発されるメタファーを脇に置くようにして、一連の短篇を書いてきたのもあった。そこで僕が、むしろ積極的にもくろんでいたのは、旅の間ラウリーをもう

一度読み、旅の終りに、——よし、自分としてラウリーはこれでしめくくることにしよう、と決意することであつた。そして旅に同行する人びとに一冊ずつ、当のラウリーを贈ることにする手順であつたのだ。若い頃、心があせるまま、ひとりの作家に永くとどまりつづけることができなかった。中年すぎになれば、やはり老年から死にいたるまでに集中して読むという作家の数が見えてくる。そこで時どき意図的に、このようなしめくくりをおこなわなければならぬのである。さて、旅の間、僕はかつて経験したことがない濃密なスケジュールで動きながら——しかしこれらとしての仕事への論理にしたがうテレヴィ・チームと、気持の良い関係をたもちつつ——移動の飛行機や汽車、またホテルの部屋で自分が様ざまな時に引いた赤線のあるラウリーの小説を次つぎに読んでいった。夕暮のフランクフルトに汽車が到着する直前であつたが、ラウリーのもっとも美しい中篇に思える『泉^{ザ・フォレスト・バース}への森^{ザ・ナトリグ}の道』の、作家であり音楽家でもある語り手が、創作への励ましをもとめる祈りを書きつけた箇所に、僕は新しく自分を引きつける契機を見出したのである。

新しくというのは、以前にもそこを読んで感銘を受け、祈りの言葉の前半を小説に引用したほどであつたのに、今度はさきに重要に思えた部分につづく、祈りの後半に、眼をひかれたのだからだ。自分の再生のための新環境を主題に音楽をつくりだそうとして果たせぬ語り手が、親愛なる神よ、と呼びかけつつ、援助してくれることを祈りながらいう。へ私は、罪にみちておりますゆえに、誤った様ざまな考えから逃れることができません。しかしこの仕事を偉大な美しいものとする営為において、真にあなたの召使いとさせていただきます。そしてもし私の動機^{モティフ}があいまいであり、楽音がばらばらで意味をなさぬことしばしばでありますなら、どうかそれを私が秩序づけ

うるようお助けください、or I am lost……」。

もちろんそれは文章全体の流れに立ってであるが、僕はとくに最後に原語のまま引いた、その半行ほどに特別な牽引力を見出したのだ。僕は信号を受けとめたように感じた、——さあ、いまはラウリーの作品から別れて、もうひとつ別の世界へ入ってゆき、また数年間はそこに逗留すべき時だと、はっきりある詩人の作品群を示し、優しい手つきで指し示してくれる師匠ベジの声のような……それは日曜の夜で、金曜から帰郷していた若い応召兵士らが、また兵営へ戻る旅立ちの時だった。学生のような兵士らが寝台車の窓際通路に立ち、圧縮バルブのついた小さなラッパを長ながと高鳴らせて、かれらの都市に別れをつげる、なおプラットホームに残っている兵士たちには、少女めいた愛人たちがなんとかなだめて汽車に乗せようとする。あるいは別れを惜しんでもう一度抱きあおうとする。そのような雑踏のプラットホームに降り立ったことが、僕に自分としての別れの思いをくっきりきざませた、というのでもあるのだが……

駅から出てホテルに向いながら、僕はテレヴィ・チームが大量の器材を運びだす時間を利用して、駅構内の書店から見つけてきた「オクスフォード・ユニヴァーシティー・プレス」版のウィリアム・ブレイク一冊本全集をたずさえていた。その夜から、僕は数年ぶりに、いや十数年ぶりに、集中してブレイクを読みはじめたのであった。最初に僕が開いたページは、へお父さん！ お父さん！ あなたはどこへ行くのですか？ ああ、そんなに早く歩かないでください、話しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い子になってしまおうでしょう」という一節だった。この終りの一行は、原語で「Or else I shall be lost.」である。

ここに書きうつした翻訳は、十四年前に——つまりははっきり辿ってみると、さきに書いた、数

年ぶりに、いや十数年ぶりにというところが、實際、数年どころではなかったのだと気づくのだが、過去のことをいうについておなじような経験はこのところしばしばしてきた——障害のある長男と父親の自分との、危機的な転換期を乗りこえようとして書いた小説で、僕が訳してみたものである。そのような特殊な仕方であつて影響づけられた詩人の世界に、あらためて強く牽引され、そこへ帰って行こうとしていること、それはやはり他ならぬ息子と自分の間に新しくおとずれはじめている、危機的な転換期を感じとっているからではないか？　そうでなければ、ラウリーの *Or I am lost* が、ブレイクの *Or else I shall be lost* へと、どうしてこれほど直接にむすんで感じられるだろう？　フランクフルトのホテルで、僕は幾度もベッドサイドの燈を消しながら、眠ることができぬまま、あらためてブレイクに——この本には赤い紙表紙に、斃れつつある裸の男が墨色で刷られていたが——戻ってしまいつつ落着かぬ思いで考えたものだ。

僕はこの息子が畸型の頭蓋を持って誕生した際、その直後に書いた小説にも、ブレイクの一行を引いていた。いまはどのようにしてそのブレイクが、まだ若く読みためた本もすくない自分の記憶にあったのか不思議なほどだが、「出エジプト記」の、ベストを主題にしたブレイク自身の版画についても記述しつつ。《*Sooner murder an infant in its cradle than nurse unacted desires……*》、赤んぼうは揺籠のなかで殺したほうがいい。まだ動きはじめない欲望を育てあげてしまうことになるよりも、と二十年前の、この小説を書いていた僕は訳したのだが……さてはじめに引用した『無垢の歌』の「失なわれた少年」からの後半は次のようだ。へ夜は暗く 父親はそこに居なかった 子供は露に濡れて ぬかるみは深く 子供は激しく泣いた そして霧は流れた。》

三月の末だったが、フランクフルトではまだ日暮から霧が立った。一、二週後にせまっている復活祭^{イースター}の、自分としてはヨーロッパ民俗の、死と再生のないあわさったグロテスク・リアリズムの源の祭りにかさねて、つまり観念的にのみ知っているその復活祭^{イースター}が、人びとに待ち望まれ、盛大に祝われることの切実な意味を、はじめて僕は納得するようであった。街路をかざる橡の巨木にわずかな新芽が吹き出すということもなく、ただ黒い樹幹に街燈の光をやどした霧がからむようであるのを、不眠のままに立つて行った窓から見おろしながら……

成田空港に戻りつくと、日本の春は終りに近く、その陽気の気配自体、こちらの感受性から躰の具合まで、それとなく弛緩させるふうだったが、迎えに出てくれた妻と次男とが、僕のような気分とはなにやらチグハグな様子なのである。いつもなら空港・バスで箱崎へ向うところを、テレビ会社^{ヴィ}が準備してくれた車に乗りこんでも、妻も次男も口を開こうとしない。かれらなりに難かしい戦闘を、頽勢のなかで戦いつづけてきたというふうな、ぐったりした様子でシートにへたりこんでいる。私立の女子中学校の上級に進んで、宿題やテスト準備に追われている娘は別として、長男が迎えに来ていないことについても黙っている。

はじめ僕は、花の名残りをさがすというより、新芽の勢いのあきらかな雑木林を薄暮の光に見つめていたのだが、そのうち気がかりな思いでよみがえってきたのは、旅の後半ブレイクを読みながら、あるいはその行間で放心するようにしながら、息子と自分の間に、つまりは僕の家族全体に、危機的な転換期がやってきつつあると、幾度も感じるようであったことだ。そしていかに疲弊した様子の妻から、現実始まっている徴候の二、三について聞かされる際の、ドカンとや

ってくるだろう衝撃に、なんとか防禦態勢をつくらうとして、そのように自分も黙ったまま樹木の新芽を眺めつづけ、こちらからは——ある小説で障害のある息子のことをそう呼んだように、ここでもイーヨーという渾名をもちいることにしたいが——イーヨーはどうだった？ と聴き出さねばならぬのを先に延ばしている自分に、気づいていた。

しかし成田から世田谷にいたる車での道のりはまことに長いのだ。ついには妻も口を開かざるをえない。そしていったん口を開けば、なにより彼女の心に覆いかぶさり真暗にしている事態について話すほかにはない。そこで妻は、低く鬱屈しているが、たよりないことでは幼児的な声音で、——イーヨーが悪かった、本当に悪かった！ と報告したのであった。つづいて彼女が運転手の耳への気がねもあり、押え押えしているのがわかる語り口で、つたえたところは次のようだ。

僕がヨーロッパへ発つて五日目に、息子はある確信に到ったかのように——その確信がどういう性格のものであるかについては、妻はこの点とくに他人には異様に響くであろうことを惧れて車の中では話さず、また帰宅しても息子にお襦袢をさせてベッドに入れるまで話さなかったのだ——乱暴を始めた。養護学校の高校一年から二年にあがるところで、春休みの一日それまでの級友と別れる集りがあった。養護学校に近い、砧ファミリィ・パークという所へ集ったのだが、そのうち鬼ごっこをすることになった。子供らが鬼になって、各自の母親を追いかけるやり方である。他の母親たちと一緒に妻が駆け出した時、息子は遠目にもあきらかな逆上ぶりを示したというのだ。怯えて立ちどまった妻に、追いつがってきた息子は、体育で習った柔道の足払いをかけた。うしろむき真っすぐに倒れた妻は、頭の皮膚から出血したのみならず、脳震盪をおこしてしばらく起ちあがれぬほどであった。担任の先生方や、ほかの母親たちが、あやまるよう口ぐち

にいわれたが、息子は頑強に黙りこみ、仁王立ちして地面を睨みつけるのみであった。

その日帰ってから、気がかりなまま観察することをはじめた妻の眼に、息子は弟の部屋に入りこんでは、羽がいじめしたり小突いたりして、弟を迫害している様子なのである。誇り高い弟は声をあげて泣くことはせず、母親に告げ口をすることもなかったのだが。そして本人は車のなかで、その話をする母親に対し、恥を耐えているようにうつむき軀を硬くしてはいるものの、話の内容を僕に否定しはしなかったのであった。息子のお襦袢の世話をするをはじめ、万事につけ障害のある兄に氣を使う妹が、その心づかいのためにかえって反撥されて、顔のまんなかを拳で殴られるところまで妻は目撃した。そうしたことが重なり、怯えた、あるいは腹をたてた家族にかまってももらえなくなった息子は、養護学校が休みであったこともあり、朝から晩まで大ヴォリュームで再生装置をならしつづけた。そしてこれも帰宅しての深夜によく妻が話したことなのであるが——三日ほど前、皿にあるものをわざわざ一度に頬ばってむさぼるようにする息子の、おそろしく早い食事に遅れて、妻たちが食堂の隅にかたまって夕食をつづけていると、台所から庖丁を持ってきた息子が、両手で握りしめたそいつを胸の前にささげるようにして、家族とは反対の隅のカーテンの脇に立ち、暗い裏庭を見つめて考えるようであったという……

——病院に収容してもらうよりほかないかと思つたわ。身長も体重もあなたと同じなのだから、私たちには齒がたたない……

妻はそういつてあらためて黙りこんだ。そこでずっと口を開かなかった次男ともども、われわれ三人は暗澹たる巨大なものの影のうちにある具合に、全的に萎縮して、なお長い道のりをすごしたのである。庖丁うんぬんについてはもとより、先にいった、息子を見舞った奇態な固定観念

についても、まだ耳にしていなかったにもかかわらず、それでもすでに僕は、ヨーロッパの旅で蓄積した疲労の総体に抗しがたいようであつた。

そしてこのような経験に際して、まずおちいる退嬰的な心の処し方があらわなのであるが、僕は直接妻の言葉に面とむかいなおすより前に、いったん迂回路をとって考えることを選んで、ブレイクのもうひとつの詩を思い描いていた。次男をはさみ脇に坐っている妻のてまえ、膝の上のショルダーバッグから「オクスフォード・ユニヴァーシティ・プレス」版のブレイクを取り出すことまではしなかったけれども……

『経験の歌』に、不定冠詞のついた、「失なわれた少年」という詩が——もとより広く知られた一篇がある。『無垢の歌』の定冠詞つきの少年とちがつて、こちらのある自立した性格の子供は、父親に挑戦的な抗弁をする。『誰ひとり自分より他を自分のように愛しはしない 自分より他を自分のように尊敬しはしない また「思想」によって それより偉大なものを知ることとは不可能なのだ』だからお父さん、どうして僕が自分以上に あなたや兄弟たちを愛せよう？ 戸口でパン屑をひろっている あの小鳥ほどになら あなたを愛しようけれど』。

脇でそれを聞いた司祭が腹を立て、少年を引つたてののみならず、悪魔として告発することさえしてしまふ。『そしてかれは焼き殺された かつて多くが焼かれた聖なる場所で、泣いている 親たちの涙はむなく このようなことがいまもなおアルビオンの岸で行なわれているのか？』

憂鬱な家族を乗せた車がついに家まで辿りつき、暗い玄関先にトランクを運び込んでいるところへ娘が顔を出した。彼女もまた母親や弟同様、あからさまに鬱屈をたたえた表情だったが、僕